連載

欧州から (13) 英国ソニック・アーツ・ネットワークとその後

石井 紘美
Hiromi Ishii
International Kunstakademie Heimbach Eifel

概要

この連載記事は主に欧州における現在の電子音響音楽に関する様々な活動や問題を電子音響音楽と一般社会、電子音響音楽と教育、電子音響音楽と現代音楽界などの観点からレポートしていく。今回は JSSA の発足とほぼ同時期に逆に姿を消したイギリスのソニック・アーツ・ネットワークと『その後』にフォーカスする。

This article-series reports today’s issues and activities associated to electroacoustic music in Europe from the viewpoints of “electroacoustic music and general society”, “electroacoustic music and education” and “electroacoustic music and contemporary music society”.

1. SAN

SAN の歴史は古く、1979 年に創立。フェスティヴァル、イヴェント、委嘱そして教育プログラムを通して聴衆と実践者双方を響きのアートに結びつけようという目的で発足し、名誉パトロンはカールハインツ・シュトックハウゼン Karlheinz Stockhausen だった。意外かもしれないが、ドイツの電子音響音楽協会である DEGEM[1] よりも英国 SAN のほうがずっと古く、シュトックハウゼンにとってはより結びつきのあるものだった。

SAN の様々な活動に、例えば CD シリーズの発行があった。毎回異なるキューレーターが選ばれ、簡単なソノシート風の紙パッケージで幅広い層のサウンドアートの CD を発行していた。

また Cut and Splice という実験的電子音楽のフェスティヴァルを開催、海外の作曲家やパフォーマーを招いてコンサートやイヴェントが行なわれ、1997 年から開催され始めた EXPO Festival は、教会や大学のホールでのコンサートやライブハウスでのパフォーマンスなど、様々なバックグラウンドを持つ電子音響音楽系アーティストを網羅した全国的な開かれた場であった。

浜辺で行なわれた『シンギュラリティー（Singularity)[2] 』は、マーチングバンドやインタラクティヴ・エレクトロク・サウンドなどを結びつけたサウンドゲームというイヴェントで、英国現代音楽ネットワーク (CMN) によるサポートで Trevor Wishart の企画制作で女王の在位２５年祝祭行事の一部として 1977 年に初めて行なわれた。

この他、SAN は様々な現代音楽教育プロジェクトを行ない、若手や既にキャリアのあるアーティストなど英国内のあらゆる層の会員達に新作やインスタレーション企画を委嘱し、その活動をサポートしていた。

SAN の会員数は当時約６００人、かなり大きな団体だったといえるだろう。

2. SAM の発足と問題

その SAN が『姿を消した』。しかし消滅したわけではなく『吸収合併された』というのがより適当な表現だ。英国にはその時点で幾つもの現代音楽関連団体があり、アーツ・カウンシル[3] の音頭取りでニューミュージック・

[1] ドイツ電子音響音楽協会は 1981 年ブルージュで設立された C.I.M.E.（Confédération International de la Musique Electroacoustique）の東ドイツ支部として 1986 年に東独のベルリン芸術アカデミーに設立された Werkstatt-Tage Elektroakustischer Musik を前身としている。1991 年に 38 名のファウンダー会員により発足、移行期間を経て 1994 年名称を DEGEM と変更。旧東独ベルリン芸術アカデミーのゲオルク・カッツァーと西独のベルリン工科大電子スタジオ所長フォルクマー・ハインを中心として統一ドイツの電子音響音楽組織として発足した。このためシュトックハウゼンは名誉会員となってはいるものの、ケルン派の影響はほとんどない。

[2] シンギュラリティはイギリス版の『偶然性をもつインスタレーション』で、アメリカのチャンス・オペレーションに相当する。

[3] 英国の文化行政は国家機関として日本の文化省にあたる DCMS (Department for Culture, Media and Sport) があり、これと各芸術文化団体の間に行政とは独立したアーツ・カウンシルという機関がある。アーツ・カウンシルはイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの四組織があり独立運営体制をとっていて、その主な財源は国家予算とロッタリー（宝くじ）である。アーツ・カウンシルは毎年 DCMS から充てられる資金の各文化芸術分野への配分などを決定しており、職員、カウンシルメンバーともに公務員は含まれていない。ゆえに文化政策に対しての政治的介入はなされない。しかし一方ではこれらの準公共機関と行政機関との距離は責任の存在を曖昧にしているとの指摘もある。アーツ・カウンシルに関して、川崎伸子氏の論文が詳しい (参考文献参照)。

プロモーション協会 (SPNM)[4]、ブリティッシュ・ミュージック・インフォーメーション・センター (BMIC)[5]、現代音楽ネットワーク (CMN)[6] と SAN が合併し、2008 年、SAM (Sound and Music) という一つの団体としてスタートした。

当時の SAN 運営委員の言葉によれば、会員の多くはこれらの団体の幾つか或は全部に所属しており、年会費だけでも大変な負担だったし、また、作曲を学ぶ段階で電子音響音楽が教育課程に組み込まれている現在では、あえて電子音響音楽とそれ以外のアンプラグドの現代音楽を「どちらの作曲家だ」というように主義主張をもって分ける必要が少なくなってきた、またインターネットの発達した現在では、それぞれの団体が纏まった方が経費が少なく利が多いなどの事情もあった。

このようにスタートした SAM であるが、2012 年 3 月、英国の大手新聞ガーディアン紙に『公開状』が掲載された。SAM は作曲家達をがっかりさせている、期待を裏切っているというのである。この公開状の筆者はコリン・マシューズ[7] という作曲家で、彼と作曲家ニコラ・レファヌ[8] を含むその他 250 人以上の現代クラシック音楽系会員は SAM がその機能を全うしていないことに不満を表しているという。

マシューズは、SAM は教育関係など一部活動はうまくやっているものの、従来の四団体が行なっていた様々な活動は中断または廃止されていて、その比重の方がはるかに大きくダメージは深刻だ、と主張する。

「たとえば BMIC の Cutting Edge コンサートシリーズや Contemporary Music Network のコンサートシリーズは両方とも中止となってしまったし、まだ出版物を持たない作曲家達のための the New Voices Scheme は幾人もの作曲家達のより早いデビューをもたらしていたのに、滞った挙げ句廃止されてしまった。」

また、「SAM はアーツ・カウンシルの誘致によりこれら既存の現代音楽系四団体の機能を結びつける役を持った上位組織として設置された。アーツ・カウンシルの目的は、これら四団体の機能をより効果的な合理的方法によって維持すること、そして新音楽のプロモーションとサポートの為の首尾一貫した団体を作ることだった。（中略）確かに年間予算が大幅に削減されたことで厳しい資金状態にあるとはいえ、本来設立時に計画されたような、核となるべき使命を実行出来ていない。」（コリン・マシューズ）

これに対して様々なコメントが寄せられた。中には記事で挙げられている批判に対して事実とは異なる、と詳しい内部事情を説明するものもあり、作曲家のスコアなど『お蔵入り』になっている貴重な文献のコレクションはリニューアルする為に少なくとも 2 人はライブラライアンが必要であり、その費用が無いことなども言及された。また「SAM そのものに原因があるのではない。SAM はよくやっている。そもそも設立に当たっての目的をマシューズは誤解している、SAM は旧団体の機能を維持するためだけではなく新しいことを始めるために設立された」、また「SAM 設立を呼びかけた ACE（アーツ・カウンシル）の不誠実さに原因があり、そのことが SAM の資金を甚だしく減少させ、活動に著しいダメージを与えている」といった SAM 内部関係者の意見もみられた。が、実際問題として、例えば SPNM が行なっていた作曲家と作品の『ショートリスト』（その年の優れた新作品達の選出）とそれらの『ショウケース（お披露目コンサート）』も中断してしまったのは確かであり、これら現行プロジェクトの問題について「ショートリストを復活して欲しい！」というコメントが相次いだ。

マシューズは、元に戻るということは意図していない、この公開状を書いたのはこの機に我々が何か行動を起こすことを提案するためだ、と公開状を締めくくった。

電子音響音楽関係の団体 SAN についていえば、前述の活動は、やはり断絶してしまった。CD 発行も、フェスティヴァルも、委嘱公募も無くなってしまった。SAM の HP を訪れると、多くはクラシック系のイヴェントや活動案内であり、果たして電子音響音楽系の作曲家達のどれほどの会員達がそういった情報を必要としているのだろうかと疑問に思われる。例えば最近の情報メールのトップの記事は、『ベルリオーズの Te Deum 公演がロンドンのロイヤルフェスティヴァルホールで開催され、そのチケットの会員割引があります』というお知らせであった。このような情報は知らされないよりはいいのかもしれないが、そういったクラシック系の情報ばかりで肝心の電子音響音楽系の情報がほとんど無いのではSAM が役に立っているとはたしかに言いがたい。SAN の場合も BMIC 同様毎年行なわれるフェスティヴァル

---

[4] Society for the Promotion of New Music 1943 年ロンドンにて創立。若手作曲家達により発足、ラルフ・ヴォーン・ウイリアムズが初代会長を引き受けた。

[5] British Music Information Centre 1960 年以来、２５０以上の英国作曲家達の作品群（スコア及び録音）を収集、英国現代音楽の貴重なリソースとして知られている。

[6] Contemporary Music Network 1971 年創立。以来２５０回以上の現代音楽コンサート国内ツアーを実践してその普及と発展に貢献してきた。

[7] Colin Matthews は 1946 年生まれの現代音楽作曲家。2001 年発行の New Grove Dictionary of Music and Musicians にもエントリーを持つ英国作曲界の重鎮である。BBC によるプロムスのための委嘱やロンドン・シンフォニー・オーケストラの委嘱を始めとして、マイケル・ティルソン・トーマス指揮ロンドン・シンフォニー・オーケストラ、ロイヤル・オペラハウス・オーケストラ、海外でもクリーブランド・オーケストラなど様々な一流オーケストラにより作品が演奏されている。日本でも 1998 年のサントリー・サマー・フェスティヴァルで作品が紹介された。作曲家としての輝かしいキャリアや教職を別として、ホルスト財団はじめ幾つかの重要な機関での働きを通じて英国現代音楽界の発展に長年貢献してきた人物でもある。

[8] Nicola Le Fanu は 1947 年生まれ、同じく英国の現代音楽作曲家。ロンドン・キングス・カレッジ、ヨーク大学教授を歴任ののち定年退職。

で多くの会員が作品を発表する機会を得ていたし、それは作曲家達が互いに知り合い交流を広めるよい機会でもあった。

3. 問題の原因

合併後の変化があまりにも急激だったのだろうか。あるいはまだ組織作りが充分なされていないのだろうか。それとも合併前の構想段階で一般会員レベルまでコミュニケーションが充分なされていなかったための不満噴出だろうか。SAM の問題は原因が何であるにせよ様々な注意を喚起する機会を与えてくれる。それは例えば目的や意識の多少なりとも異なる（重なり合う部分もあるとはいえ）複数団体が合併する際に起こり得る混乱や硬直でもある。いずれにしても合併によって現代音楽や電子音響音楽全体の活動が縮小したり停滞してしまうのでは、文化活動の振興というアーツ・カウンシルの本来の意図にも反することになる。

一つの現実は、2005 年に決定した 2012 年ロンドンオリンピックのためにスポーツ関連への助成金が増やされ芸術系への助成金が大幅に削られたことで、SAM の停滞もこれが原因とする意見もあるのだが、本来なら継続的発展のための助成金は安定的に毎年各団体に配当されていて、43% もの大幅カットというのは異常事態だ。オリンピックが国家的大事業であるとはいえ、だからといって音楽系の予算を削ってそちらに回すのでは音楽家達は納得がいかない。しかし一方で、あてがわれる食べ物が少ないことを不満としてスプーンを叩いて「もっと！もっと！」と要求しているみたいだ、という皮肉を込めた発言もあった。

4. それから

2013 年 4 月、SAM は新たなヴィジョンとともに新しいプログラムのフレームワークを発表した。チーフ・エグゼクティブのスザンナ・イーストバーンはこのフレームワークに対して、Sound and Music は組織改革を行なった。このフレームワークをもってして私達は現代音楽の未来をトランスフォームさせるために働いて行くことが出来る。これは組織が過去に発展させてきた最良のものと新しいプログラムと共に備え、そのギャップを埋めることに重点を置き、チャンスへの新たな分野を開く、とコメントを寄せた。その新たなプログラムは、

- ハイ・エジュケーション・プログラム：修士博士課程などの在学中の若手で特出した才能ある作曲家のための開発プログラム
- ポートフォリオ：１４人の若手作曲家に提供される一年間のプログラムで、英国のトップクラスのアンサンブルの為の新作の作曲と彼らによる初演
- コンポーザー―キューレーター・プログラム：現代音楽のイヴェントやフェスティヴァルをキューレートする作曲家への支援
- 美術館パートナー・プログラム：美術館や文化遺産保存機関との新しい形のコラボレーション
- 聴衆の発展のためのプログラム：聴衆の保持と獲得のためのリサーチ活動

であり、既存のプロジェクトの

- アダプト・ア・コンポーザー：６つのアマチュアオーケストラや合唱団がデビューしたての若手作曲家を迎え入れ、新作の作曲に協力、初演する。毎年行なわれるプログラム
- エンベッデド：BBC シンフォニー・オーケストラなどメジャーな機関による 10 人の作曲家に対する一年間のレジデンシー提供と作品委嘱。初回は SAM がストックホルムの EMS でのレジデンシーを作曲家 1 人に提供
- ミニット･オブ･リスニング:小学生のために『リスニング＆リフレクション（Listening&Reflecton)』を奨励するソフトウエアの供給
- リッスン・イマジン・コンポーズ：義務教育の場で作曲をどのようにより良く教えられるかという問題へのリサーチ活動
- ゴー・コンポーズ：プロの音楽家による１１ー１８歳までの作曲家達のための三日間のワークショップ。
- サマー・スクール：１４ー１８歳の才能ある作曲家達のためのコース。経験豊かな作曲家/音楽家達によるサポートのもと作曲の幅広い選択肢が提供される。
- サウンディング・アウト：現代音楽全般を通じてプロフェッショナルが実践的な洞察を提供するパネル・ディスカッションやプレゼンテーション
- ISCM：国際現代音楽協会の英国支部としての活動
- Francis Chagrin 賞：若手作曲家対象に新作制作のコストを支援
- George Butterworth 賞：若手作曲家対象で、SAM のプログラムを通じて制作された優れた作品に与えられる
- ブリティッシュ・ミュージック・コレクション

も続行させていく、と発表した。英国と日本の音楽振興では事情が異なるかもしれないが、SAM が提供するこれらのプログラムは私達にとっても大変参考になるものだろう。

またブリティッシュ・ミュージック・インフォメーション・センター（BMIC）の約 3 万 1000 点の貴重な現

代音楽作品スコアについては、英国最大の現代音楽フェスティヴァルを開催しているハッダースフィールド大学が SAM に協力し、これを引き取り新しいホームを提供、2012 年にオンライン化を完成させた。

5. 『電子音響音楽とそれ以外』か『教育課程とプロ活動』か

しかし電子音響音楽に関して気がつくのは、送られて来るインフォ・メールに大学主催の電子音響音楽系イヴェント情報が含まれていないことだ。今や英国では相当数の大学が電子音響音楽のコースを持ち、スタジオを持っており、バーミンガム大学、ド・モントフォード大学始め多くの大学の音楽学部がコンサートシリーズを行なっている。しかしこれらは SAM のニュースレターには現れない。SAN が大学を含んだ、或いはフェスティヴァルの開催などにおいて参加大学に依存すらした活動団体だったのに対し SAM はアカデミックを分離している。SAN では『電子音響音楽に関わるすべての活動』を含んでいたのに対し SAM ではそのうちのプロフェッショナルと認められる部分のみが含まれた、といえるだろう。

この点については、大学で行なわれている音楽活動はプロ活動ではない、と一線を画する英国独特の強いヒエラルキー意識があるためとも考えられるし、予算を受ける関係での線引きとも考えられる。たしかに、電子音響音楽に限らぬ他のクラシック系音楽分野も大学主催コンサートを数多く行なっているが、これらの情報も全て SAM のメールには含まれていない。

これらはプロ活動ではなく教育課程なので新聞などにコンサート評が書かれる対象ではないとすることで音楽教育や研究の現場、学生達の自由な自己開発を守る意味もあるし、電子音響音楽などの場合『自分たちがやっているような先端の芸術を誰が的確に批評出来うるのか？』という懐疑もあるのだろう。何にせよ SAN の『電子音響音楽とそれ以外』から SAM の『教育課程とプロ活動』へ、線引きを変更したと思われる。しかし IRCAM や ZKM が中心的存在として活動しているフランス、ドイツと異なり、英国の場合バーミンガム大学の BEAST やベルファスト・クイーンズ大学の SARC といった大学内機関が電子音響音楽社会のリーダー的存在だった。そしてこの『線引きの変更』によりこれらの存在が枠外に押し出されてしまったのが実態だ。「英国の電子音響音楽は、今や個々の大学が独自にコンサートやフェスティヴァルを開催できるほどの力を付けた。SAN はもう解散してもいいだろう」というある運営委員の合併に際してのコメントが暗示したように、各大学は協力するところはしているが、まとまった組織ではなくバラバラに活動しているといった印象だ。

SAM からもたらされる公募情報は『オペラ』『コーラス』『器楽アンサンブル』などの新作が多く、8ch アクースマティック作品や自作ソフト・ハードウエアを使ってのパフォーマンスなどの公募はほとんど無い。5000 人を超える SAM 会員の大多数は器楽主体の作曲家達なので少数派の電子音響音楽系会員は影が薄い感があるが、現在 SAM の運営委員には電子音響音楽作曲家でハッダースフィールド大学教授（Experimental Electronic Music) のマシュー（モンティ）・アトキンスも加わっているので、この分野のプログラムも徐々に盛んになることを期待したい。いずれにせよ、SAM がようやく充実した新体制を作り出したのは確かだといえそうだ。

6. 参考文献

[1] 川崎伸子『文化政策形成の仕組みづくりのために ー海外比較研究と論点整理ー』、社団法人日本芸能実演団体協議会 2002 年 9 月

[2] 山口洋典『アーツカウンシル入門 [3]』ネット TAM アートマネジメント総合情報サイト http://www.nettam.jp/learning/intro/arts-council/03/

[3] http://www.soundandmusic.org

[4] http://www.artscouncil.org.uk

[5] SAN CD 出版シリーズ http://www.guardian.com/music/blog/2012/mar/30/classicalmusicandopera

7. 著者プロフィール

石井 紘美 (ヒロミ・イエンチ・イシイ)

博士 (PhD)。電子音響音楽作曲家またメディア・アーティストとして音楽作曲と映像制作の双方を手がける。ドレスデン音楽大学上級課程にてヴィルフリート・イエンチに電子音響音楽を師事。Konzert Examen (音楽家国家資格試験）合格後、英国から奨学金を得て 2001 年よりロンドン・シティ大学にてサイモン・エマーソン、デニス・スモーリーの指導のもと『日本伝統音楽との関係における電子音響音楽作曲』のテーマで博士研究。CYNETart、フロリダ電子音響音楽祭、英国 SAN-EXPO、MusicAcoustica、Musica Viva、ベルギー Musiques&Recherches、オランダ・ガウデアムス、イタリア EMU 祭、Punto y Raya、NYCEMF など様々な音楽祭や音楽週間にて作品が入選/招待上演され、また西ドイツ放送、中部ドイツ放送、ドイツ放送などで放送されている。2006 年（ZKM 奨学金）と 2013 年 ZKM 客員作曲家。WERGO よりポートレート CD『Wind Way 風の道』が出版されている。ケルン在住。